

月刊

2013

8
月号

みんぱく

特集

ハイブリッドか
ちやんぽんか

自然界のちやんぽん 西村達也
ミックス・ルーツが開く扉 竹沢泰子
ハイブリッドは日本宗教のお家芸だ 白川琢磨
ごちゃまぜではないハイブリッド言語 ダニエル・ロング
エレクトリック三線「チエレン」 呉屋淳子



沖繩、音楽、情熱

子供の頃、三線店を営む祖父の手伝いをしてきた。三線の皮の張り替えを終えたら「りんけん、ふかんかい、んじてい、さんしん、ぬ、うとう、ちちくーわ」と祖父は言った。「林賢、外に出て三線の音を聞いて来い」と言うのだ。

新しく張り替えられた三線の音がどこまで聞こえるか確かめる。僕はまず北の道をまっすぐ向った。祖父の弾く三線の音が小さくなってくる。かすかに聞こえるところで止まるのだ。これ以上進んだら音が聞こえなくなる。一度は戻ってきてさらに西に向う。又同じように音が聞こえる場所を確かめるのだ。次に南と東に向う。それを祖父に報告する手伝いは面白かった。

沖繩の三線の竿はユシ木や黒木で作る。それが当たり前時代の時代があった。ユシ木は練習用で黒木はちゃんとした楽器として考えられていたのだ。でもユシ木も黒木も数がとれなくなりフィリピン黒木なるものまで現れた。僕が始めてフィリピン黒木を見たのは四〇年前である。見た目は沖繩産の黒木にしているのだが、ちゃんと見るとフィリピン黒木は気孔が多い。だから沖繩産の黒木と比べると柔らかい。三線の材料の見立て方は色、重さ、堅さ、それに年数なのだ。木を切り出してから三線が作れるまでの時間も必要である。まだ乾燥していない材料で作

照屋 林賢

プロフィール
沖繩県コザ市生まれ。祖父・林山と父・林助はともに沖繩を代表する音楽家。1967年、西洋の音楽理論を勉強するために上京。1977年りんけんバンド結成、90年アルバムCD「ありがとう」で全国デビュー。93年日本レコード大賞特別賞受賞。自作詩曲「春でえんが」が中学国語教科書に採用される。沖繩固有のリズムとメロディにこだわりながらりんけんサウンドの創造を続けている。

るとのちに竿が曲がつてしまう事もあるのだ。

僕個人的にはユシ木が好きである。山原（沖繩本島北部）にたくさん生えていたらしい。黒木と比べて粘りがある。それに黒木より安かったのだ。八重山でとれる黒木はエーマクルチ（八重山黒木）と呼ばれ、とても有名である。特に三線を演奏する人たちにとってはエーマクルチで作った三線を持つことはひとつのステータスだ。古い民家の床柱などに使われていた黒木は高い値段で売り買いされていた。「くれー（これは）えーまから（八重山から）むつちちえー（持つてきた）くるちやさ（黒木だ）」という会話は最近聞かなくなった。

沖繩から三線を作る材料がなくなる日がきたらどうしよう。でも心配はいらない。沖繩の人はすぐに代用品で製作するはずだ。ワシントン条約でインドネシアからにしきへびの皮の輸入が規制された時も人工皮を考案した。それに戦後アメリカ軍の捕虜収容所で簡易ベットの材料と空き缶でカンカラ三線を作り、パラシュートの布をへび皮のように張ったりもした。そして三線を作る技法をうまく利用して電気ギターも製作したのだ。照屋楽器店にアメリカ兵が持ち込む故障した電気ギターを分解しているうちに製作をしてみようと思ったという。沖繩人の音楽にたいする情熱はどんな時代でも乗り越えて来た。

月刊 みんなぱく

8月号目次

- 1 エッセイ 千字文
沖繩、音楽、情熱
照屋 林賢

特集

ハイブリッドか ちゃんぽんか

- 2 自然界のちゃんぽん
——バイオミネラルにまなぶ次世代材料の開発 西村 達也
- 4 ミックス・ルーツが開く扉 竹沢 泰子
- 5 ハイブリッドは日本宗教のお家芸だ 白川 琢磨
- 7 ごちゃまぜではないハイブリッド言語 ダニエル・ロング
- 8 エレクトリック三線「チエレン」 呉屋 淳子

- 10 似たモノさがし
ちゃんぽんな獣たち
立川 武蔵

- 12 みんなぱく Information

- 14 地球ミュージアム紀行
探究と包摂のための博物館
——国立台湾歴史博物館

野林 厚志

16 多文化をあきなう

- 「オヤ」によるクルド難民女性の自立支援
鶴木 由美子

18 フィールドで考える

- 工人たちとの対話——アルメニア建築を読み解く
藤田 康仁

20 人間学のキーワード

- ユニバーサルデザイン
広瀬 浩二郎

21 異聞逸聞

- 移民のミックス文化——インスタントラーメン
庄司 博史

22 制服の世界、世界の制服

- 葬儀屋さんの制服
田中 大介

- 24 次号予告・編集後記

ハイブリッドか ちやんぽんか

ハイブリッドという耳触りのいい、ちょっとはやりのことばだ。少し前までちやんぽん、ミックス、さらには雑種とまでいわれ、さげすまれる一方で、なぜか強靱さへの畏敬も感じさせる。異種なものどうしが交わり、融合することであらたなものが創造される現象はどこにもみられるが、ハイブリッド的なものは、純粋性を追及したがために硬直、閉塞化した現実を打ち壊すエネルギーを秘めているようだ。本特集ではこのような視点から生物工学、文化人類学、宗教学、言語学などにおけるハイブリッドをとりあげる。純粋性の概念をあらためて問いなおす契機となるかもしれない。

自然界のちやんぽん

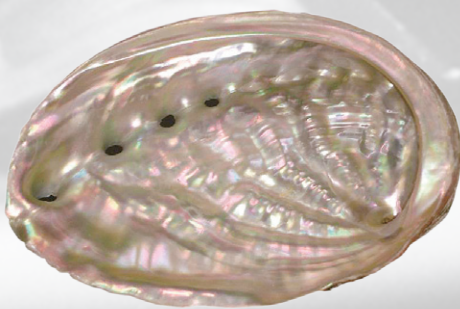
バイオミネラルにまなぶ次世代材料の開発

西村達也 東京大学助教

硬い歯・しなやかな甲羅

生物が歯や骨、貝殻真珠層などの硬い組織をつくることを総称して、バイオミネラリゼーションとよぶ。形成されるバイオミネラルの役割は多岐にわたり、体の保護や姿勢の維持だけでなく金属イオンの貯蔵や、眼のレンズなどの機能を兼ね備えたものもある。バイオミネラルはおもにカルシウムや鉄、シリカなどの無機物質（これらはチョー

ク、磁石、ガラスなど、身近でシンプルな材料と同じ成分である）と、タンパクや多糖などの有機物（それぞれ、肉の成分、ナタデココの成分と同類である）との複合体である。つまり「有機」と「無機」のちやんぽんがバイオミネラルであり、歯のように硬いものやカニの甲羅のようにしなやかなものなど、生物は目的に応じた特性や機能を有するこの「ハイブリッドな材料」を作りだしている。しかし、



アワビの貝殻真珠層
アコヤガイが作る真珠と同じ構造なので真珠のような光沢が見られる

その形成機構はいまだ明らかにされていない点も多い。自然を理解し、そのプロセスを材料開発に応用することができれば、我々の社会はより豊かになるはずだ。

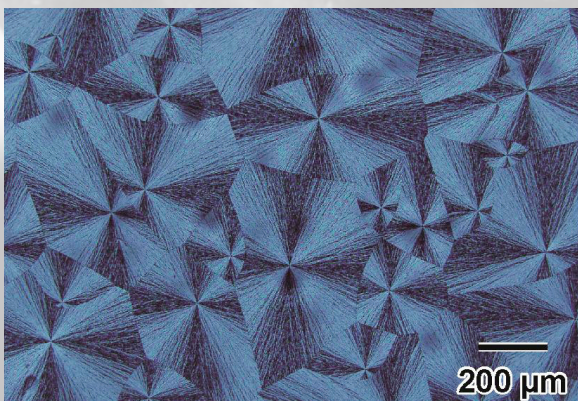
人智を超えた「ものづくり」

生物は自然界からカルシウムや鉄などの金属イオンを体内に取り込み、タンパクなどの有機物を作用させ、その結晶化を制御することにより秩序高い構造を作りあげている。真珠光沢を示す貝殻真珠層のミクロ構造はじつに美しい。貝殻真珠層は、厚み一マイクロメートル（およそ、コピー用紙の100分の1）の薄膜状炭酸カルシウム結晶が数千層重なってできている。結晶の層間にはタンパクや多糖などの生体高分子が含まれており、結晶化を制御すると同時に、形成した結晶同士を貼り付ける糊の役割を果たしている。この層状構造は真珠の美しい光沢と密接に関係しているが、力学的強度にも大きく貢献している。たとえば炭酸カルシウムだけでできた単結晶にくらべて真珠層は数千倍も破壊強度が大きい。このような精緻な構造をもった「ハイブリッド材料」が生物によって作られる舞台裏では、金属イオンの選択的な取り込み、生体高分子同士の分子認識、核形成の制御、制限された結晶成長場の形成などがおこなわれている。このプロセスは、最先端の技術をもってしても実験室で再現することができないほど複雑で高度な科学であるが、自然界では（エネルギーを使わずに）淡々と繰り返り広げられている。

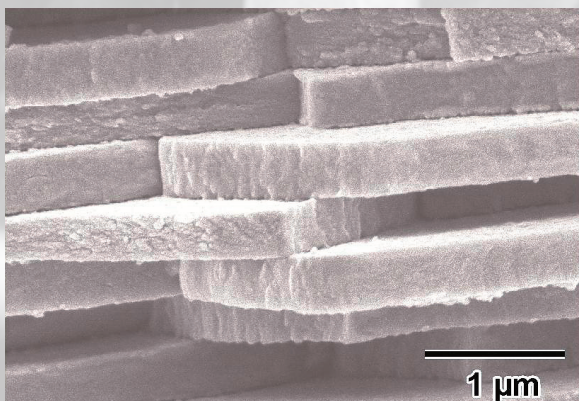
天然をまねる・超える「材料科学」

混ざり合わないふたつの素材、有機物（おもに炭素でできており、火をつけると燃える物、たとえば紙やプラスチック）と無機物（鉱物）を分子レベルでちやんぽんすることができれば、えられるハイブリッド材料は双方の性質をかせあわせた高機能なものになると期待されている。「環境にやさしく」「高機能」なバイオミネラルは、まさにその手本だ。バイオミネラルの形成過程における科学を理解し、それを抽象化して新しい材料を生み出す研究が世界中で始められている。たとえば合成高分子を用いて真珠層に類似した均一な厚みの薄膜結晶の形成が可能となった。この薄膜は、車や飛行機などの新しいコーティング方法として注目されている。

バイオミネラルは精緻な構造に由来する高度な機能・特性を有しているが、生物はカルシウムやタンパクなど限られた素材しか使えないため、目のレンズや甲羅などしか作ることができない。一方、我々は今やバイオミネラルの知識を手に入れ、半導体セラミックスや導電性高分子など生体が使えない機能性素材も「ちやんぽんさせる」ことができる。我々が作る材料が天然の美しさを超えるのは当分先の話かもしれないが、機能はアイデア次第で十分に超えられるだろう。真珠のような層状構造をもつ高効率の次世代電池やカニの甲羅のように軽くて丈夫なスマートフォンが開発される日も近いはずだ。



真珠層にならう高強度薄膜の開発
バイオミネラルと同様に有機高分子の力によって形成する薄膜状結晶。均一な厚みを持ち、基板一面を覆う。写真は鉱物を観察するための偏光顕微鏡により撮影



真珠層の秩序構造
真珠層の断面。電子顕微鏡写真からわかるように、同じ厚みの薄膜状結晶が、数千層重なって形成されている

ミックス・ルーツが開く扉

たけざわ やすこ 京都大学教授

日本にルーツをもつ人びと

京都の街が例年にもまして美しい桜で賑わったという今年四月、ロサンゼルスで二足早い夏の陽気を味わっていた。南カリフォルニア大学でおこなわれた「ハバ・ジャパン学術会議」に出席するためである。「ハバ」とは、元来ハワイのピジン語で、複数の文化的ルーツをもつ人びとを意味するが、現在では、ルーツのひとつがアジア系アメリカ人である人びとを指す用語として流通している。主催者が造語した「ハバ・ジャパン」とは、ハバのなかでも日系のハバに焦点を当てるものらしい。人目を引く真っ赤なポスターの中央を飾るのは、日の丸のイメージに、円形の四分の三や二分の一など、日系が占めるさまざまな比率をあらわすパインを重ねたデザインである。

学術会議も含め計五日間の祭典では、ヨーロッパ系（白人）と日系のミックス・ルーツをもつ当事者が大半を占めるなかで、少数ながら、アフリカ系などのマイノリティと日系のミックス・ルーツをもつ者もいた。二年前の今回は、同会議で表彰された演歌歌手のジェロが多く、観客を集めた。今回も、アフリカ系の父をもつ劇作家ペリーナ・ハス・ヒューストンによるトークがあり、同会議におけるアフリカ系のハバの存在感は希薄ではない。

るつぼの国のレイシズム

「人種のるつぼ」といわれるアメリカ合衆国。大ヒット作となったイズレイル・ザングウィルの戯曲「The Melting Pot」（人種のるつぼ）が初めて上演されたのは一九〇八年と一世紀も前のことである。移民大国アメリカで、さまざまな人種が交わり合い、新しい「アメリカ人」の誕生とともにユートピアが生まれる、と期待された。しかし現実には、一九六七年まで異人種間結婚禁止法が一九の州において施行されていたのである。ようやく二十年ほど前から、紆余曲折を経ながらも「マルチレイシャル運動」（独自のカテゴリーとして社会的承認をえようとする運動）が波及するようになった。前述のハバ会議もその大きなうねりのなかに位置づけられる。

「ハーフ」が自分を語る時

さて、日本はどうだろうか。日本人らしき女性と欧米系の男性が幼児を抱えて電車に乗り降りする姿は、もはや都会では日常風景となっている。地方では、中国や韓国、あるいは東南アジアから妻を迎えたという話も珍しくなくなった。沖縄の「アラジアンスクール」が設立されてから、すでに一五年が経過している。二〇一〇年度の統計によると、あらたな婚姻の二〇組に一組が国際結婚だとされる。

関西を拠点にコミュニティメディア等とおしネットワークを広げている「ミックスルーツ・ジャパン」は、今や知る人ぞ知る存在である。最近注目を集めているのは、二人の自称「ハーフ」の女性たちが、映像とインタビューによって、日本で生きる「ハーフ」たちの経験やアイデンティティに迫る「ハーフ・プロジェクト」である。アジア系のハーフが含まれていないという批判もあるが、ハーフの容姿の「ちがいを」意識的に取りあげるこの作品を見るうちに、日本社会において、外見が「日本人」らしくないことが何を意味するのか、改めて考えさせられる。

マとしておこなっている大学院の授業で、ある学生が自らの体験から語る。日本では、国籍ではなく、外見で「日本人」か否かが判断されると。日本人でありながら、容貌が異なれば「ガイジン」と指さされる。メディアで「ハーフ」が憧憬の対象とされ、「ハーフ顔」が消費される一方で、日常世界においては、排除の掟はまだまだ緩みそうにない。そのようななか、ただひとつ変化の手応えを感じるものがある。当事者たちが次世代研究者として育ちつつあるということだ（わたしの授業でも、他大学所属も含めて四、五人いる）。近い将来、これまで闇に葬られていたさまざまな物語の扉がひとつひとつ開けられることだろう。



「ハバ・ジャパン学術会議」の様子。ハバがその多くを占める



「ハーフ・プロジェクト」小冊子の表紙 ©2013 The Hapu Project



「ハバ・ジャパン・フェスティバル2011」でパフォーマンスを披露する演歌歌手のジェロ



「ハバ・ジャパン・フェスティバル2013」のポスター



木造太郎天及び二童子立像（長安寺蔵）本来、屋山中腹の六所権現社に祀（まつ）られていた。（撮影・鈴木一響）

ハイブリッドは日本宗教のお家芸だ

経験としての神仏習合

宗教のハイブリッド化は、一般にシンクレティズムと称されるが、日本の場合、神と仏の融合は「神仏習合」として捉えられてきた。この歴史は古く、既に八世紀後半、畿内の神々が「神の身を離れて仏になりたい」と巫女の口を借りて語り出したことが始まりであった。や

白川 琢磨 福岡大学教授

がて中世に至るとその波はうねりとなって全国を覆い、明治初期の「神仏分離」によって強制的に排除されるまで、千年以上にわたって、我々の文化の支配的様式としてその影響力を保ち続けたのである。

明治の神仏分離が強烈かつ徹底的であったが故に、今日の我々は神と仏はまったくの別物で

あり、習合の感覚を想像することさえ難しい。だが、今日でもその経験がなくなつたわけではない。モノから始めよう。

豊後、国東半島、六郷満山のひとつである屋山の長安寺が所蔵する「木造太郎天及び二童子立像」である。銘文によると大治五年（一二三〇）に造られ、当時は「屋山太郎惣大行事」とよばれていたらしい。じつに不思議な神像である。像高は大体人の背丈くらいで、両脇の童子はちょうどその半分ほどだ。髪をみつらに結つた等身大の若者像に直面すると生々しい親近感を覚えてくる。だが住職が最初にこの像を紹介したとき、太郎天とは一言も言わずに「不動明王と矜羯羅・制多迦の二童子です」とさらっと言った。これが習合感覚である。不思議に感じるのは、我々が強引に「神」と「仏」をわけようとするからであり、我々「人」に近い太郎天の背後に不動明王の鏡像を感じ、さらにそれが大日如来の教令輪身であることを感得すれば、仏と神（天）は緩やかに繋がってくるのだ。

「人」と「神」の近さ

当時の人びとの世界観を示すのが「六道」の考え方だ。輪廻転生を余儀無くされる六つの世界で、下から地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天（神）の六つにわかれている。この住人である限り、性別や寿命がある。仏はこの六道を超越した世界に存在する。人と神は、性別や寿命や喜怒哀楽を共有する、六道の上位に位置する極めて似た存在である。人であった菅原道真は、死後、天満大自在天という神となった。やがて、仏は

衆生を救うために日本の神となつて現れたという本地垂迹の思想となる。

「鈴鬼」の不思議

「鬼」も、この人と神の間隙から出現する。同じく六郷満山の長岩屋、天念寺で旧一月七日に「修正鬼会」という正月儀礼がおこなわれる。主役は、昼過ぎから延々と続き、深夜、最後のクライマックスに登場する「災払鬼（赤）」「愛染明王」と「荒鬼（黒）」「不動明王」の二鬼である。ところがこの両鬼が登場する直前に、両鬼を「招く」という役割を担って「鈴鬼」というじつに不思議な存在が出現する。この鈴鬼、男女一対で鈴と団扇を手に十種の穏やかな法舞を披露する。男女の性別ははっきりしており、衣装を見てもどちらかという人である。しかし、頭には紙手を付けており、何よりも神の象徴である鈴を鳴らす。しかも名称は鬼である。つまり、人と神の属性を分有するハイブリッド



天念寺修正鬼会の鈴鬼（女）



天念寺修正鬼会の荒鬼（不動明王の化身）と災払鬼（愛染明王の化身）。松明を手に講堂内を暴れまわる

な鬼なのだ。

「駆先（ミサキ）」のハイブリッド性

豊後の北、豊前地方には多数の神楽が分布し活発に活動している。その豊前神楽の主役が、駆先（ミサキ）とよばれる鬼である。このミサキ、同系統の古い祭文によれば、「御仏の前にて荒神となり、神の前にて御前（みさき）となる、有漏の凡夫の外道となる。：仏神ともに我なり」と、荒神（仏）「ミサキ（神）」外道（鬼）（衆生）という見事なハイブリッド化を示している。しかし近世後期から神官らを中心に、ミサキは記紀神話の猿田彦尊に該当するという解釈が広がっていき、やがて習合を敵視する神仏分離を迎えるのだ。日本宗教のお家芸であったハイブリッド化を放棄してしまつた近代明治は、文化の豊饒さの大きな部分を失つてしまつたのである。



湯駆先（ゆみさき）とよばれる湯立て神楽（山内神楽）。駆先が手にしているのは扇と「シカンジョウ」の杖（つえ）、または鬼杖とよばれる駆先独特の杖である

ごちゃ混ぜではないハイブリッド言語

言語と言語が触れ合うとき

一八世紀にウィリアム・ジョーンズがサンスクリット語、ラテン語、ギリシャ語、英語などが共通の祖語から枝わかれる過程に気づいてから、ずっとそうした樹形図が言語の歴史や系統を説明するためのモデルとして利用されてきた。しかし、言語接触に関するデータ収集や理論の構築が進めば進むほど、言語は数世紀単位で起こる分岐だけではなく、数十年単位で起こる接触がもたらす影響も大きいという認識が高まっている。世界の言語のなかに、ハイブリッドやちゃんぽんにルーツをもつものは意外と多いのかもしれない。

現代英語の形成過程にもハイブリッド化が重要な役割を果たしている。ただ単にドイツ語やオランダ語から枝わかれてきただけではなく、約一〇〇年前にフランス語の到来によって、WH疑問詞が関係代名詞として使われ始めるなど、文法体系が大きく方向転換したといわれている。日本語も同様である。アルタイ系の言語とオーストロネシア語とのハイブリッドによって誕生したという説が有力なので、日本人や英語圏人は言語接触に対して前向きなイメージをもつていて良さそうだが、じつは逆である。

言語の純粋性

言語のハイブリッド化はマイナスに評価されることが圧倒的に多い。「ちゃんぽん」という語も悪いイメージが付きまとう。「混合」イコール「不純物が入り混じっている」のである。戦時中の日本では、日本語から外来語を漢語や和語に置き換えるという敵性語排斥運動があったし、戦後の韓国では、韓国語から日本語起源の単語を無くす純化運動が推進されたのである。個人レベルでも、ふたつの言語を絡み合わせて話す話者は「セミリンガル」と決め付けられる。本当はそのふたつの言語を巧みに織り合わせれば、意思の疎通ができる。その混合言語を使えば考えている事は何でも思う存分に表現できるのだが、周りから（そして言語学者と称する者の一部からも）言語的に欠陥があると見られるのである。

「ちゃんぽん」のなかの秩序

わたしが長年フィールドとしている小笠原諸島には、ハイブリッド化によって形成された混合言語体系が使用されている。欧米系島民のあぐだで「Next Saturday morning, me is your house」に来るから、タマナの木で作った鋸でワフーの突きん棒漁しよう」のような言い方が

ダニエル・ロンゲ 首都大学東京教授



Tシャツを飾る挨拶のことは島で使われてきた三つの言語、英語、ハワイ語、そして小笠原混合言語



ハワイ語のヴィリヴィリが訛（なま）った木（ティゴの仲間）の名前ビーデーデが小笠原高校の学園祭の名称としても使われている

日常会話で聞かれる。これは単なる言語コードの切り替えではないかとよく聞かれるが、そうでないと思わせる事実がいくつもある。例えば、欧米系の人に「子どものころ、家のなかや近所の人と話すときに使った言語は？」と尋ねると、「meの language は English and Japanese を mix していたものだじゃ」と答える。今の中高年層になっている彼らが第二、第三の言語として英語と日本語を身につけたのはその後だと言う。混ぜ方が適当（恣意的）かと調べてみると、動

詞の活用部分に日本語が使われる傾向が強いことがわかる。しかし、彼らのしゃべり方はひとつの「言語」であると思わせるもっとも興味深い要素は、こちらが提示したごちゃ混ぜ文に対して、彼らはきちんと文法性判断ができる点である。わたしのような部外者が英語と日本語を適当に混ぜて話すと、彼らは洗い顔をして、「それは sounds funny だじゃ。meらはそれ言わないよ」と、自分らのハイブリッド言語は「なんでもあり」ではないことを断言する。



小笠原の子どもが「仲間に入れてください」という意味で使った「meもせーれー」は語源不明だが、小笠原フラの練習会場「せーれー館」の施設名に見られる

エレクトリック三線 「チエレン」

呉屋 淳子

民博 機関研究員



民博収蔵の黒のチエレン。
標本番号 H0224351

三線とは異なる楽器

沖繩の伝統楽器、三線にもエレクトリック三線があることを知っているだろうか。一九九五年にエレクトリック三線「チエレン」が沖繩で誕生した。このチエレンという楽器は、三線をモデルにつくられており、ネックもボディも三線と同じように蛇模様プリントされている。しかし、チエレンは、三線とは異なる弦楽器なのである。チエレンの制作者である照屋林賢氏になぜチエ

深化する沖繩音楽

そもそもエレクトリック三線を最初に発案したのは、父親の照屋林助氏だったという。彼は、四線というエレクトリック三線を開発した。作りはとも単純で、三線にマイクを付けただけのものだった。これに対して、息子の林賢氏が開発したチエレンは、音響工学の知識を駆使して設計された新しいタイプの電気楽器なのである。チエレンの音色は三線の音色とは異なり、リズム楽器やリード楽器のような多様な音を出すことができる。また、チエレンは黒と赤のふたつのタイプがあり、それぞれ曲の雰囲気に合わせて使い分けられている。ちなみに、民博で展示されているチエレンは黒のタイプ。黒のボディにへび柄の模様がどここされ、その姿からは想像もできないほど、柔らかく、ゆっくりとした甘い音を奏する。そして、赤のチエレンは、音の速度に対して幅広く対応することができ、躍動感のある熱い音を響かせる。林賢氏は、「三線にはできないことがチエレンにはできる」という。こうした奏法の自由度が高まることで、沖繩音楽は深化し、より豊かな表現の世界に向かっていくというのだ。従来の三線が電気とのハイブリッドによって、三線のその秘めたる可能性を生み出し、ひいては沖繩音楽の可能性の追求に繋がっていくのである。

最後に林賢氏は、「僕たちがやっている沖繩音楽は、伝統を受け継ぎながらも、変化を伴いながら発展を目指す音楽なんだよ。三線はまだ未完成。だから面白いんだ」と語った。



赤のチエレンを弾く照屋林賢氏（提供・株式会社アジマア）



林賢氏のレコーディングスタジオに並ぶさまざまな弦楽器。
左から黒のチエレン、赤のチエレン

レンと名付けたのかについて伺ってみた。彼が中学生のとき、父親の照屋林助氏の手伝いで伊江島に渡ったときに、チエレンと声を発しながら弦試をする光景を目にしたことがきっかけだったそうだ。三線は、弾く前にならずチンダミをおこなう。チンダミとは、チューニングのことである。

「チエレン」という響き

沖繩本島北部の海に浮かぶ伊江島には、「きーぶぞー」という座興歌がある。沖繩の多くの歌は、三線による伴奏を付けて唄うのだが、きーぶぞーは、三線による伴奏を必要とせず、「口三線」といって三線の音色を真似ながら口ずさむだけ。きーぶぞーとは、木製の煙草入れのことで、この煙草入れをコンコンコンとキセルで叩きながらリズムをととり、更に「トウルルンテン・テントウルルンテン」という口三線を歌の前後、あるいは間奏に入れるのが特徴の座興歌である。

伊江島の口三線の場合も三線同様、チンダミをおこなうのだが、その際、チエレンと発するそうだ。つまり、彼が伊江島で聴いた「チエレン〜チエレン〜チエレン〜」という音（声）は、きーぶぞーを唄う前のチンダミだったのである。

数十年経っても覚えていたというその響きは、あまりにも衝撃的な音（声）だったそうだ。エレクトリック三線を開発したときに、その響きを思い出し、迷わずチエレンと名付けた。



- ① グリフォン
- ② ケンタウロス
- ③ ユニコーン
上記3点『ドン・ファン・デ・アウストリアの動物誌』（ファクシミリ版、民博図書資料 F112002561）より。同書は1570年ごろに制作され、スペインの王族ドン・ファン・デ・アウストリアに捧げられた動物誌。実在の動物だけでなく、不可思議な生き物や民族についても絵入りで解説されている。
- ④ マカラ（寺院入口装飾用木彫）、ネパール、H0148680
長い口をもち、海に住む伝説上の怪獣（写真、向かって左下）。
- ⑤ 金の鯨（置物）、愛知県、幅5.7×奥行1.7×高さ4.2cm、H0014562
- ⑥ スフィンクス人形、エジプト、幅2.8×奥行5.1×高さ3.9cm、H0015229
- ⑦ ガネーシャ神像、インド、幅17×奥行15×高さ31cm、H0092628
- ⑧ 牛鬼人形、愛媛県 宇和島市、幅5.3×奥行4.1×高さ18cm、H0026695
- ⑨ 人魚（土人形）、メキシコ、幅13×奥行6.6×高さ17cm、H0132092

似たモノ
さかし

似てるけどどこが違う
似てないようでどこか似てる
いろんな工夫や思いを映す
みんなの所蔵資料

ちゃんぽんな獣たち

立川 武蔵 民博 名誉教授

各国の「合成・ちゃんぽん」のなかから似たものがしをせよ、という電話が『月刊みんなの』からかかってきた。それ以来、我が家では論争が続いている。「名古屋名物」のミンカツは「合成」か否か、というのが争点だ。わたしは、「単なる同居だ」と反対する。ひつまぶし、天むす（天ぶらいりおむすび）にかんしても意見がわかれる。

天空を駆けるワシと野の王者ライオンを合成しようという古代人のもくろみは成功した。幻獣グリフォン（グリフィン）はヨーロッパから日本にいたる地域で有名だ①。日本のある会社のロゴマークにもなっている。ミンカツとはスケールが違う。

人の顔とライオンの胴体の合成作品「スフィンクス」は、すこし迫力に欠けるが、



①

石の姿を今に残している⑥。胴体から上がヒト、下が馬という組み合わせ（ケンタウロス）は誰もが考えそうなものだが②。競馬場でウマたちのお尻を鞭で叩いている騎手たちは「この馬に羽があったらな」と思うにちがいない。オスプレイの代わりに羽のある馬バカサスが空港に降り立つということなら、わたしは見に行く。

山羊座は、エジプトでは上半身ヤギ、下半身は魚だったそうだ。この「合成獣」はインドで口はワニ、胴はクジラの海獣マカラになった④。やがて、ネパールでは足や翼も生えた。中国では鱗のある魚となり、名古屋ではとうとう「金のしゃちほこ」になった⑤。ちなみに金羅のサンスクリット「クンビラ」はマカラのことだ。こうなると合成とちやんぽんとかいう域を超えている。



②

古代の人びとはなぜこうした「合成獣」を考えたのか。理由はよくわからないが、ともかくそうしたもののが欲しかったことは確かだ。なぜ欲しかったのか。「聖なる」シンボルにするつもりだったのか、人をおどかさつもりだったのか。現代人の怪獣とかわらない、とわたしは思う。

これらの古代の「創造的合成」はかわいらしい。だが、現代の「合成」、たとえば遺伝子組み換えは恐ろしい。その姿は見せないのだが、人間たちの命を左右するかもしれない。生命が合成されると、それは自己増殖する。そして、人間たちの制御を超える危険性もあるのだ。

我が家の論争は続いている。ひつまぶし、つまりお茶漬けとウナギの組み合わせは創造的合成だとわたしは主張する。これはゆずれない。



③

特別展
「渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館」—Attic Museum—
 日本銀行総裁、大蔵大臣を歴任した渋沢敬三はまた、邸内に私設博物館兼研究所を設立した民俗学者でもありました。本展では、渋沢敬三の経歴と民俗学研究を紹介いたします。
 会期 9月19日(木)～12月3日(火)
 会場 特別展示館

「世界のニッポン、みんなのニッポン」
「夏秋のみんなのフオーラム2013」
 新しくなった日本の文化展示「祭りと芸能」「日々の暮らし」を広く知っていただくため、約半年間、展示のテーマに関連した様々なイベントを開催します。
 11月23日(土・祝)まで
■関連イベント
◆展示場クイズ「みんなのQ」(8月27日(火)まで)
 日本の文化「祭りと芸能」「日々の暮らし」編新しくなった日本の文化展示を楽しみながらクイズに挑戦してみましょよ。

企画展
「アマゾンの生き物文化」
 野生のサルや鳥などをペットにして飼育慣らするなど、地球最大の熱帯林を持つアマゾンの

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13時30分～15時(13時開場)
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は、観覧料が必要です)
 第423回 8月17日(土)
「新日本の文化展示関連」
「つくりもの」ハレのかたち・おもしろいかたち
講師 菅原亮二(国立民族学博物館教授)
 西岡陽子(大阪芸術大学教授)
 福原敏男(武蔵大学教授)
 祭りや年中行事などのハレの機会に、様々な趣向を凝らした造形物を見物に供する「つくりもの」が、西日本を中心に見られます。各地では、人々はおもしろいかたちを作ることを競い合い、それを楽しみに大勢の人々が見物に集まってきました。そんなつくりものの魅力について考えます。
 各地のつくりもの(右)上 熊本県山都町・左上 富山県高岡市・下 島根県出雲市

第424回 9月21日(土)
「特別展開連」
「屋根裏部屋博物館主人の横顔」
講師 近藤雅樹(国立民族学博物館教授)
 少年時代に友人たちと一緒に「コレクション」を持ち寄り、馬車庫の屋根裏で博物館ごっこをしていたのが渋沢敬三でした。生物学者になるのが夢でした。長じてからは邸内に本格的な博物館兼研究所を建て、若い研究者たちの育成にも心を砕いた渋沢の一面についてお話しします。

生き物と人のかかわりを紹介します。
 会期 8月13日(火)まで
 会場 企画展示場A
■関連イベント
◆ギャラリートーク
 8月3日(土) 中牧弘允(吹田市立博物館長)
 8月10日(土) 11日(日) 池谷和信(民博教授)
 各日13時～13時30分
 ※申込不要、参加無料、要観覧料
企画展
「武器をアートに」
「モザンビークにおける平和構築」
 モザンビークでは、内戦終結後に回収した武器でアートの作品を作りだすという事業が進んでいます。アートを通して平和を築く営みを紹介します。
 会期 11月5日(火)まで
 会場 企画展示場B

企画展
「台湾平埔族の歴史と文化」
 台湾の平埔族の人びとが歴史資料、博物館資料をてがかりに、民族のアイデンティティを再構築していくようすを紹介します。国立台湾歴史博物館との国際連携展示です。
 会期 9月12日(木)～11月26日(火)
 会場 企画展示場A
来館者1000万人達成記念イベント
 本館は1977年の開館からの来館者数が、8月に1000万人に達する予定です。8月を記念月間として、感謝イベントを開催します。
 期間 8月1日(木)～8月31日(土)
 期間中、高校生以下及び満65歳以上の方は本館展示を無料で観覧いただけます。
 ※その他詳細はホームページでご確認ください。
みんなの秋の遠足 校外学習
事前見学&ガイダンス
 秋の遠足・校外学習にむけて事前見学会に来館される学校団体の先生方を対象としたガイダンスを開催します。新しくなった展示について

友の会

国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (平日9時～17時) FAX 06-6878-3716
 http://www.senri-f.or.jp/ e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

でも研究者が展示場で説明します。
 実施日 8月20日(火)、22日(木)、23日(金)
 時間 14時～17時
 会場 第5セミナー室ほか

研究公演
「うたのふゆわん」
 アルタイ山脈の周辺地域では「のど歌」という歌唱法がうたいつがれてきました。のど歌のもっともさかんなトウバと、その隣のアルタイから歌手を招きます。
 日時 9月8日(日) 13時30分～16時
 会場 講堂 (定員450名)
 ※参加無料、事前申込制
博学連携教員研修ワークショップ2013 みんなのく「学校と博物館をつくる国際理解教育」
「センヤクもくろい あぶら・おとしる・たのしみ」
 本館を活用した国際理解教育の実践事例の紹介やワークショップを通して、国際理解教育における博学連携の意義や可能性について考えます。
 日時 8月6日(火) 10時20分～17時
 会場 講堂およびセミナー室、本館展示場内
 ※参加無料(事前申込制、当日参加可)
 お申し込み先
 情報企画課宛 FAX 06-6878-8242
 ※各イベントについてくわしくはホームページをご覧ください。
 ※電話でのお問い合わせ受付時間は、9時から17時(土日祝を除く)です。

刊物紹介
■人間文化研究機構 監修
『HUMAN』
—知の森へのいざない vol.4—
 平凡社 定価:1,575円
 「巨大古墳と王権」を特集し、巻頭で古代史の吉村武彦氏と考古学の松木武彦氏が対談。諸論考で国家形成に向かう列島の足音を聞く。他に、民博の音楽展示・音楽の祭日の紹介などを掲載。

国立民族学博物館
ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112
 FAX 06-6876-0875
 e-mail shop@senri-f.or.jp
 水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
 オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
 http://www.senri-f.or.jp/shop/

来館者1000万人達成記念福袋

今月(2013年8月)は、民博の来館者1000万人の達成を祝う記念月間です。
 ミュージアム・ショップでも、みなさまのご愛顧への感謝をこめて、記念福袋を販売します。民博のオリジナルグッズや世界各地の民芸品を組み合わせた民博ならではの内容をご用意しています。何と何の組み合わせかは見てのおたのしみ。
 民博では記念イベントも開催されますので、その際にもぜひお立ち寄りください。なお、記念福袋は1000個限定ですので、お求めの方はお早め。



記念福袋 1,050円(税込)

探究と包摂のための博物館

——国立台湾歴史博物館

博物館に展示されているものは、過去の遺物ではない。未来を見据えたうえで、展示をどのようにとらえ、どのように活用していくのかを、来館者とともに考え、つくりあげていく「場」としての博物館が必要とされている。

経験と共有の場として

ここ数年、日本の博物館をとりまく状況が厳しい。経済状況や政治情勢に翻弄される博物館の姿を目の当たりにし、人びとは博物館に何を求め、それらは人びとに何を提供できるかが改めて問われていることを痛感する。そんな問いにヒントを与えてくれそうな博物館がある。台湾の古都台南に昨年一〇月に開館し、一年間で一〇〇万人をこえる来館者を迎えた国立台湾歴史博物館（台史博）である。建物正面の太陽電池パネルで作られた巨大な看板が来館者の視線を奪い、館内では四階までの吹き抜け構造の展示場に圧倒される。来館者はどこからでも博物館全体を見渡せ、過去から現代、現代から過去の視点をつねに意識させる展示場のプランは計算しつくされた感がある。常設展示の締めくくりに子どもたちのメッセージ映像である。将来の自分の夢、未来の世界へ向けた希望を自分たちのことばで来館者に伝えてくれる。博物館が、何かに気づき、ものを考え、その経験を多様な人びとのあいだで共有していくことを促す探究と包摂の空間であるならば、その目的や展示の形態、アウトリーチ活動もまた多様であってよい。多様な博物館の存在が許容された地域で育まれた子どもたちは、探究心旺盛で他者を理解する能力に長けた世代として、その地域の将来を支えてくれるにちがいない。そんな予感を台史博の子どもたちのメッセージは感じさせてくれる。

「われわれ」の歴史を知る

台史博の呂理政館長は長らく博物館学の最前線で活躍し、日本の博物館もあまなく訪ね歩いてきた。

そんな呂館長に、入場者数のことも含め博物館の成功を讃えたところ、来館者が多い博物館がよい博物館とは限らないという意外な返事がかえってきた。博物館はそれぞれの目的をもち、その館に合った来館者数や見学の方法があるというのだ。開館初年の入場無料の措置も手伝い、台史博は来館者数を順調に伸ばしてきたが、それ以上に、台湾の人びとが自分たちの歴史に飢えていたという社会的な背景が人びとの足を博物館に向けさせていると感じた。二次大戦後の国民党施政下、台湾の歴史は中国史の一部であり、中国の歴史が台湾の歴史であるという教育が施されてきた。それが、民主化促進や政権交代という社会の劇的変化を経験し、あらためて台湾の歴史を深く知りたい、台湾とはいったい何かを知りたいという探究心が人びとのなかで膨らんでいったことは想像にたやすい。

うれしい悲鳴と、託された未来

ところで、呂館長の目下の悩みは、来館者からの寄贈資料が増え、登録作業が追いつかないことであった。来館者は、自分たちが台湾の歴史を作ってきたというに気づき、歴史を物語る自らの資料を博物館に託し始めている。多様な人びとが集い、それぞれの歴史を共有し、伝えていくための現場として博物館が息づいている。それは将来に向かって歴史を作っていくとする台湾の人びとの着実な歩みであり、心意気のあらわれでもある。さらに見逃せないのが、資料の提供者に無償で進呈される博物館資料の保存読本である。彼らの資料が博物館でいかに大切に扱われるかを伝えることを目的として作られ、これを見れば、この博物館なら自分たちの資料を安心して託せ、自分も博物館をつくりあげる一員となれることが実感できるだろう。博物館がフォーラムとして機能するために大切にしなければいけないのは、何であり、誰なのかを台史博は日常的な実践のなかで自然に示しているのである。

そんな台史博で三月の中旬に、特別展「カンケンハイホ 看見平埔」（邦訳・平埔を見つめる）が開幕した。平埔とは本来は平地を意味する。この展示会は平地に住んできた先住民である平埔族の歴史と文化をテーマにしている。平埔族の人びとは、清朝時代から中華民国施政下にいたるまで漢族と同様に扱われ、文化や福祉の面で優遇措置が施される原住民族の人びとは社会的に一線を画してきた。そうした状況のもとで彼らは今、歴史に刻まれた自分たちの祖先の姿をてがかりに、エヌシティの再構築を試み、それを社会のなかで認めてもらうための社会運動を展開している。平埔族の歴史が台湾の歴史の一翼を担っていることを紹介する展示会は、民博の国際連携展示として九月に本館展示場でも開催する予定である。目下、日本の来館者の皆さんにむけた展示プランを練っている最中である。



野林厚志
のぼやしあつし
民博 研究戦略センター



国際連携展示「看見平埔」の開幕式で挨拶をする民博 朝倉敏夫教授



「看見平埔」展で出品された民博の資料の搬入の様子。台史博の多くの館員がかかわっている



寄贈者に無料で進呈される保存読本



媽祖（まそ）巡行を再現したジオラマ展示と呂理政館長（右）。左は本人がモデルになった人形



台史博常設展示場。広々とした空間も魅力のひとつである

鶴木 由美子

認定NPO法人難民支援協会（JAR） 定住支援部チームリーダー

難民の女性たちが作り出すレース編み「オヤ」は、彼女たちが故郷の中東地域で確かに生きてきた証であり、一人ひとりの物語を、わたしたちに伝える。

これも、ものの売買にとどまらない「あきない」のもつ力ではないか。

日本に住む難民

難民。昨今、テレビや新聞を通じて聞きなれたことばかもしれないが、遠い国の難民キャンプにいる人たちだけをさすことばではない。

難民とは、人種、宗教、国籍、政治的意見やまたは特定の社会集団に属するなどの理由で、自国にいと迫害を受けるかあるいは迫害を受ける恐れがあるために他国に逃れた人びとのことである。そのような難民は保護を求めて日本へもたどり着いている。その数はこれまでに一万人以上といわれており、近年は急増し昨年だけでも二五〇〇人以上の難民が保護を求めた。

迫害から逃れ、やっと着いた日本で、彼ら彼女らを受け持っているのは、求めていた平和な生活とはかけ離れた現実。日本語や日本の法律は何もわからず、もちろん家も仕事もない。友人や親戚など頼りになる人や悩みを相談できる相手もいない。そんな孤独で先の見えない状況のなか、日本で

アなどの国境地帯に暮らしており、「国家をもたない世界最大の少数民族」との異名をもつ人びとである。山岳地帯だが肥沃な土地で、ぶどうなどさまざまな果実が栽培されている。クルド難民の多くがヨーロッパに逃れているが、一部は日本に向かっている。政治活動や兵役忌避など難民として保護を求める理由はさまざまである。

オヤとは

クルド民族など中東地域に暮らす女性たちに伝わる伝統手芸、それが「オヤ」である。オヤはレース編みで、その技法・道具によって名称が異なる。たとえば、細いレース編み針で製作する「トゥーオヤ」や、縫い針で製作する更に細かいレース編みの「イーネオヤ」、ビーズを編みこみながら製作する「ホンジユクオヤ」などいろいろな種類がある。

オヤの図柄としては季節の草花をモチーフにしたものが多く、心情を豊かな色彩であらわす。オヤは家族ごとに口承で技術が伝えられていくため、作り方も出来上がりも家族それぞれで、編み手の一人ひとりが世界でひとつだけの作品をつむぎだす。伝統のレース編みであるオヤに着目し、クルド難民女性への自立支援事業に取り組んで四年以上が経つ。JARではクルド難民の女性たちとともに「トゥーオヤ」を製作・加工し、さまざまなイベントやセレクトショップで紹介しながら、彼女たちの文化や、難民となったいきさつ、これまでのさまざまな経験を伝えている。

世界的にみてもオリジナリティが高いオヤの図柄には、作り手一人ひとりの気持ちがこめられてい

難民として認められる手続きに二年から五年以上かかることもある。しかし日本でくらす人びとには、難民一人ひとりのライフストーリーはおろか、難民の存在すら知られていないという悲しい現実がある。

わたしたち認定NPO法人難民支援協会（JAR）は、日本に逃れてきた難民が、自立した生活を安心して送れるよう支援する団体である。JARは、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の事業実施契約パートナーでもあり、一九九九年の設立以来、日本の難民保護を目的として総合的に活動している。日本にいる難民から、年間一件以上の相談をうけ、専門的なスタッフがその一人ひとりへ支援をおこなっている。さらに、難民への直接支援だけでなく、日本における難民保護の制度改善のために、「政策提言」、「調査研究」、および「情報発信」などもおこなっている。

クルド民族は、トルコ・イラン・イラク・シリア

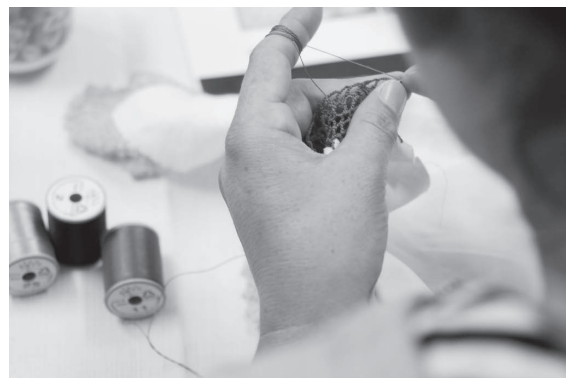
る。中東の女性たちにとって、オヤは自分の気持ちを表現する手段でもある。難民であるために個人情報公開することが難しい作り手たちは、顔や実名を明かして自分たちのストーリーを直接語る機会が限られている。わたしたちはそのような難民の声を代弁し、現状を伝えている。

オヤ製作のプロジェクトは、単に、作品づくり、製品展開、あきない、という活動にとどまらず、日本に逃れてきた難民女性たちにとって、自らの存在と文化、そしてライフストーリーを発信する貴重な手段となっているのである。

難民問題をどう解決するか

日本では難民に対する公的な保障は十分とはいえない。ただ、日本で生活するわたしたち一人ひとりが「家族や友人に難民のことを話す」「理解者を増やす」「自分の専門を生かしてボランティアをする」「支援団体に寄付をする」などのさまざまな選択をすることで、難民保護の可能性を広げられる。現在、JARではオヤ製作のプロジェクト以外にも、クルド難民をはじめとする難民の故郷の味とライフストーリーを紹介したレシピ本の販売をスタートさせた。

「難民」という名前の人はいない。難民とよばれる人びとにも一人ひとりの人生のストーリーがある。オヤやレシピなど身近な文化の発信を通じて、難民たちの生きざまやストーリーを人びとの心に届け、社会を動かしていく。その確信をもって、これからも難民とともに挑戦を続けていきたい。



オヤを編むクルド難民の女性



オヤのアクセサリ



オヤを紹介するイベント



オヤのピアスとネックレス



難民が故郷の味を紹介するレシピ本

※写真はすべて難民支援協会より提供

フィールド で考える

工人たちとの対話 ——アルメニア建築を読み解く

藤田 康仁
東京工業大学助教

アルメニア建築とは

アルメニア建築とは、四世紀初め、世界で最初にキリスト教を国教としたともいわれるアルメニア民族が、今日まで連続と建て続けてきた教会建築をいう。黒海とカスピ海のあいだに位置するアルメニアの地政学的条件とその歴史を踏まえると、この建築群は、単にキリスト教建築の歴史だけでなく、ローマ帝国やササン朝、ペルシア、ビザンツ帝国にウマイヤ朝、セルジューク朝といった、絶え間なく迫り来る強国の狭間で、東西の建築文化が如何に混淆したのかという、より大きな歴史と文化の流れを考えるうえでも、重要で興味深い研究対象といえる。アルメニア建築の調査を続けて一五年。アルメニア共和国の他、トルコ共和国に残るものも含め、二〇〇を超える遺構を踏査してきた。

歴史建築調査の手法

調査は、できるだけ多くの遺構を、できるだけ例えば、その匂いは、あるとき建築の壁面から不意に漂ってきた。アルメニア建築は、壁面内部のモルタルと粗石を、壁面の表層を構成する切石がサンドイッチのように挟みこむ、ラブル・コア工法を採用している。みれば、表面の切石の目地が水平に揃っている。それは、当然だが、当時の職人がその高さを決めて切石を製材し、積み上げたことによる。彼らがどのような物差しを使って建物を建てていたかは明らかにされていないが、この切石の高さには、それを逆算できる可能性が秘められている。さらに、この切石の水平目地は、必ずしも常に連続しておらず、しばしばずれも認められる。こ

詳細に調べることが旨とする。遺構の全体像と細部を具に記録する写真撮影、建築の空間の様子を収めるビデオ撮影、形や大きさを把握するための平面実測や写真測量の他、建物や地盤の構造を解析するための微動観測や、建築材料の特性を知るための材料の採取も適宜実施し、建築史の研究者だけでなく、各分野の専門家と共同して研究を進めている。

これまで欧州を中心におこなわれてきたアルメニア建築に関する研究を振り返ると、建築の平面や立面の二次元的形状、彫刻等の装飾の分析から、その特徴が捉えられてきた。しかし、建築とは本来、具体的な建築材料を組み立てること成り立つ、立体的な構築物である。我々の調査研究の背景にある、実体としての建築物の性質を如何に捉えるかという発想と手法は、欧米とは異なり、建築学や建築史学が工学の分野に属する日本の研究システムに依拠しているともいえる。こうした調

のずれの生じる箇所は、壁面と壁面が接合する建物の隅の部分や、壁面上に柱が埋め込まれている部分に多い。おそらく、壁面を施工する際の工事箇所に分があり、その区分ごとに切石の高さを決めた結果、こうしたずれが生じたのであろう。時代がくだるにつれてこのずれが解消され、水平目地が建築全体で揃うようになるが、この傾向からは、建築技術の水準が上がって建築全体を計画するようになったのと同様に、ドーム（半球形の天井）という難易度の高い構造物の導入に伴い、より精度の高い水平な「土台」を建築の下部で実現する意図を読み取ることもできる。

査研究でえられた成果は、一方で、遺構の保存修復へ活用できる利点も備えている。

研究の「嗅覚」

実際の調査は、いわば単調なルーティンワークである。遺構に到着すると、各調査員がそれぞれの役割を黙々とこなしていく。ただ、その作業に専念するだけでは、調査報告はまとめられても、なかなか研究には結びつかない。常にどこかで、研究への「嗅覚」を働かせている必要がある。

こうした建築の作り方は、これまでのように建築の平面形状ばかり眺めていても見えてはこない。筆者の経験からいえば、目地のずれのような、遺構のなかで時折見受けられる小さなほころびや齟齬に、建築を理解するヒントが多く隠されている。当時の建築技術や工人の工夫と苦勞が偲ばれる。こうしたほころびを見つめるのは容易ではないが、一五年を超えてなお飽くことなく調査を続けているのは、現地調査に「嗅覚」を研ぎ澄ませながら、遺構に残された、かの工人たちの手仕事と思考の痕跡に触れることに、彼らと「対話」する面白さを見出したからなのかもしれない。



リプシメ教会堂（7世紀創建）



建築物の微かな揺れ（微動）を測って、構造的な特性を把握する



建築物の大きさと形を測る写真測量の作業



水平に連続する切石の目地

二〇一三年二月、学研教育出版から『みんなのユニバーサルデザイン』(全六巻)が出版された。本シリーズの狙いは、「家族、学校、自分の住む町、交通、買い物、旅行など、身近な例からユニバーサルデザインの考え方をわかりやすく伝えること」であり、小中学校の図書館等での活用が期待されている。日本では近年、駅や空港、病院やホテルなどの公共施設に始まり、スポーツやアートの分野でも、日常的にユニバーサルデザイン(UD)ということばを見聞きする機会が増えた。まさにUDは「みんな」のものになった印象がある。

UDとは、「だれもが暮らしやすい社会」を実現するための実践的方法論といふことができる。それを簡単に定義すると、「文化・言語・国籍の違い、老若男女、障害の有無に関係なく、すべての人が利用できる施設・製品・情報の設計(デザイン)」となるだろう。この概念は、一九八五年に米国の建築家(肢体不自由者)のロナルド・メイス(一九四一―一九九八)によって提唱されたもので、九〇年代には日本をはじめ、世界各国に普及した。実際には「すべての人」のニーズに対応することは困難だが、「できるだけ多くの人」が利用可能となるような創意工夫は、二二世紀の共生社会を築くための鍵ともいえよう。ユーザーを障害者、あるいは高齢者に限定しないので、UDはさまざまな企業の商品開発にも応用されるようになった。

UDの具体例をいくつか挙げてみる。駅の「ホームドア」

ユニバーサルデザイン Universal Design

ひろせ こうじろう 民博 民族文化研究部
広瀬 浩二郎

みんながわかる
人間学の
キーワード

の設置により、視覚障害者の転落事故はなくなり、だれもが安心して使える駅ホームが完成する。事故の危険は目が見えない人にだけあるものでなく、貧血や飲酒のためホームから転落するケースも意外に多い。ギザギザの印を付けたシャンプリーのボトルは、日本発のUDとして国際的に受け入れられている。頭を洗っているときは目をつぶっているため、触覚でシャンプリーとリンスが区別できるのは、だれにとっても便利だろう。

体験プログラム「警女文化にさわる」など、民博で僕が担当するイベントのチラシには点字を印刷している。「見る人だけでなく、さわる人にもチラシの内容を伝えたい」という僕なりのUDへのこだわりである。幸い、この「さわるチラシ」は健常者(見常者)にも好評で、今後も続けていきたいと思っている。

点字は文字の大きさを変えることができないので、A4の用紙に入る情報量はおのずと限られる。チラシの両面に印刷された視覚情報のなから、どの部分を点字にすべきか、いつも頭を悩ませている。点字用にあつたな原稿を作り、さわって読みやすいレイアウトをおこなう。この作業を通じて「UDには正解がない」ことを実感している。すべての人(より多くの人)にとってわかりやすいデザインを求め、知恵を絞る柔軟性と創造性こそがUDの人間学的な本質だといえるのかもしれない。

移民のミックス文化 —インスタントラーメン

しょうじ ひろし
庄司 博史 民博 民族社会研究部

近年西ヨーロッパの都市では移民はすでに風景の一部となり、労働力としてばかりでなく、消費者としても大いに社会に貢献している。なかでもわたしが興味をもっているのが、文化の仲介者や活性役として受け入れ社会で果たしている役割である。

異文化への入り口 エスニックショップ
フィンランド、ヘルシンキの中心部、かつての工場地帯の一角ではエスニックショップがこの一〇年のあいだに急にふえた。食品から化粧品、衣類や雑誌にいたるまで、東アジアや中東、アフリカから来た人びとが日常必要とする雑貨はほとんどそろう。

近年日本にもみかけるようになったエスニックショップと雰囲気もかわらず、みかければ入ることにしているわたしにとって安らぎを感じさせてくれる空間だ。たまにいる髭もじやの一見こわそうな店員もほとんどが愛想よく応対してくれる。

文化の交錯するインスタントラーメン
そこでかならず目にするのがインスタントラーメンである。インスタントラーメンなんて、と思わないでほしい。それをおしてじつにおもしろい文化の伝播や混交がみえてくるのだ。もとは日本発祥といわれ、アジアにはまた



マレー系中国人のエスニックショップ (ヘルシンキ)

たく間に普及した。最近では日本のスーパーでも韓国や中国のものをみかけるようになったが、エスニックショップではさらに世界がひろがってくる。その種類にまず圧倒されるのだ。これでもかといわんばかりに多くの種類のラーメンが個性的なパッケージと言語で彩られて並んでいる。南アジア系、東南アジア系、東アジア系それぞれ力点の

おき場はちがうが、香辛料や麺素材、あわせ具材の違いをたのしませてくれる。キムチ味はもちろん、フオー味、マサラ味、カレー味、トムヤン味やミーゴレン味の他、イスラム教徒のためのハラールラーメンもある。

現地に根づくミックス文化

これら自体が日本発のラーメンとのミックスの産物だが、おもしろいのは移民のもたらしたラーメンがヨーロッパに根づき、さらに現地の食文化とミックスしつつあることだ。少し前までエスニックショップに入る勇氣さえなかつた人びとがいろいろなラーメンを買い求め、今ではスーパーでも普通にみかける。香辛料をおさえたラーメンも現地で製造されていて、ロシア製やポーランド製をみたときには正直おどろいた。ちなみに、日本でもエスニックショップをみかけたらぜひ入ってみることおすすめしたい。いままでみたくもないラーメンがみつかること保証します。



葬儀屋さんの制服

「制服を着たフィールドワーカー」というと、どのような姿を想像するだろうか。制服を着て、つねに身なりを整え、いつでもでも請われるままに駆けつけ、しかも相手は生きている人間とは限らない。そんな一風変わったフィールドワーカーに明け暮れてきたわたしの研究対象は、葬儀屋さん。その世界を、制服という切り口から少しだけ覗いてみよう。

田中 大介 早稲田大学人間科学学術院助手



「さいたまセレモニー」の式場スタッフの制服。しっかりと背筋を伸ばし、それでいて威圧感や横柄な印象を与えず、あくまで顧客を丁寧に「受け容れる」姿勢を穏やかに醸しだしている点に注目してほしい

葬儀屋さんに「なった」

「タナカ、いまから新宿に行つていい。なに、プレゼントだよ。うちの会社と契約している紳士服店があるから、そこで『ぼく、新人です』って伝えるんだ。そう、制服をつくるのさ。タナカの、な。それを着たら、これからはガクシヤじゃなくなるな」

そんなことばから、フィールドワークがはじまった。「ガクシヤじゃなくて、まだ大学院生なんです」というわたしのたどたどしい返事も含めて、いまでも思い出すことができる。ことばの主は、わたしが約一年間にわたって弟子入りすることになった葬儀社の、葬祭事業本部・葬祭部長。つまりは現場のトップだ。

そして数日後に事務所に届いたのは、控えめだが瀟洒な感じのスーツが数着。ちょうど少し前に同じタナカという苗字の社員が退職したばかり

なあ」と思うことしきりだった。ほとんど夜討ち朝駆けに近い日々には憔悴しきつて、身なりを整えるどころではなかったのだ。「ぼろは着ても心は錦」ということばがあるが、その逆に「錦は着ても心はぼろぼろ」の状態である。だからこそ葬儀屋さんの熟練度は、ある程度まで、その身なりでわかってしまう。膨大で複雑な仕事を的確にこなし、かつ「人間の死」を前にして礼節を保つことができるだけの能力、知識、人間性が、そこにあらわれるからだ。

寄せ書きで埋め尽くされた白衣

この原稿を書いている最中に、とある葬儀屋さんを訪れてみた。少し驚いた顔で、しかしにつこりと笑ってわたしを出迎えてくれたのは、埼玉県本庄市を中心に営業している「サンメンバーズ・さいたまセレモニー」の小林一敏副社長と、野川高德本部長。二人とも葬儀の現場を知り尽く



死者の制服ともいえる死装束。浄衣(じょうえ)、もしくは明衣(みょうえ)ともいう。多くの場合、このように一揃いのセットになっている



小林副社長と野川本部長



葬儀社でフィールドワーク中の筆者

だったので、その人の残していったネームプレートをスーツの胸ポケットにつけたとき、わたしは葬儀屋さんに「なった」。

死を前にして礼節を保つ

もちろん、そのときには遺体の納棺も、霊柩車の運転も、祭壇の設営も、悲しみに打ちひしがれる遺族の前で感情を制御することも、何ひとつできるわけではなかったから、それは単に「なった、ような気がした」だけなのかもしれない。それでも、はじめて自分の制服に袖とおしたときは、確実に自分の何かが変わっていくような感覚をおぼえたのはたしかだ。制服のちから、とでもいえるだろうか。

とはいえ、フィールドワークをはじめた当初は自分でも「似合っていない大ベテランである。そのような方々でも気を抜いて、身なりどころではない瞬間もあろうと意地悪く不意打ちで訪問してみたが、その思惑は外れてしまった(写真左中)。だらしない腕まくりをして、姿勢もどこなく疲弊しきっているわたしの過去の写真(左下)と見比べると、恥じ入るばかりだ。

そんなわたしもフィールドワークが進むうちに、一応は制服のスーツが徐々に似合うようになったのだが、永遠にその場に居続けるわけにもいかない。最後の日、わたしが弟子入りした葬儀社の人びとが開いてくれた慰労会で、「ガクシヤはこれが制服だろ?」ということばとともに手渡してくれたのは——びつしりと寄せ書きで埋め尽くされた白衣。

「いや、社会人類学者が白衣を着ることはあんまりないですが……」とは、やはり言えなかった。制服ではじまったフィールドワークが、制服で終わるとすれば、それはそれで首尾一貫しているのだから。

8月

みんなくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■ 14時30分から15時30分

■ 展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。どんだん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

4日

(日曜日)

話者：韓敏（国立民族学博物館 教授）
話題：家系図でつながる人びと
会場：本館展示場（東南アジア横休憩所）

11日

(日曜日)

話者：山本泰則（国立民族学博物館 准教授）
話題：梅村忠夫著作目録データベースの引越し
会場：本館展示場（ナビひろば）

18日

(日曜日)

話者：浜田明範（国立民族学博物館 機関研究員）
話題：ガーナの病気と医療
会場：本館展示場（ナビひろば）

25日

(日曜日)

話者：伊藤敦規（国立民族学博物館 助教）
話題：米国先住民ホビのソーシャルダンス
会場：本館展示場（ナビひろば）

1年間みんなくに何度でも入館できる「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいあります。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引

◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引

◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

編集後記

みんなくを知らない人にわたしの仕事を説明する際、まどろっこしいな、といつも思う。「研究活動と博物館活動を一体的におこなう博物館をもった研究所」で働いているのです、とパンフレットに準じて言ったところで、一般の人にはやはりわかりにくいと思う。肩書きは准教授で、館内では先生とよばれるがここは大学ではない（でも大学院があって、学生もいる）。本業は「研究者」で、「研究室」もあり、論文や本を書くことが研究業績になるのだが、日常的には展示や博物館広報の業務に明け暮れている（小誌の編集もその一端）。

要するにみんなくは、ハイブリッドな機関なのである。研究と博物館業務は、異なる作業ではあるが決して矛盾していない。研究の成果を文字だけでなく、モノの展示を通して立体的に見せ、さらに音楽や創作などの体験を介してさまざまな地域・民族・時代の世界観を伝えるには想像力と忍耐力を要するが、その「創造的合成」の現場はじつは楽しいのである。

しかし体力も時間も限られているだけに、そのふたつの要素のバランスがなかなか難しい。（山中由里子）

●表紙 手桶 標本番号：H0106663

日本、京都府 大徳寺より寄贈

市販の手桶の下部に真ちゆう製の蛇口がとりつけてあるところにハイブリッド感がただよう。

次号の予告

特集

美麗島——台湾

月刊みんなく 2013年8月号

第37巻第8号通巻第431号 2013年8月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1

電話 06-6876-2151

発行人 八杉桂穂

編集委員 山中由里子（編集長） 櫻永真佐夫 久保正敏

庄司博史 菅瀬晶子 丹羽典生 野林厚志

編集アドバイザー 山内直樹

デザイン 宮谷一欽

制作・協力 一般財団法人 千里文化財団

印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。

●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分。

●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。

●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんなくフェイスブックページ

<http://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

